丹波篠山

いがぐり頭の十歳くらいの男の子が外から走って帰ってきて、井戸端に直行する。たらいの中にキュウリが何本か冷やしてあり、一本つかんでポリポリうまそうにかじる。それが彼のおやつだ。日焼けしてランニング姿で、外では蟬(せみ)が鳴いている。

というとても鮮明な記憶が私にはあって、頭の中で何度も繰り返し再生される。わかっているのはこの子供が私の父だということで、だからどう考えても理屈に合わないのに、最近ますますくっきり、ますます頻繁に思い出す。

記憶の中のこの場所は、たぶん父が生まれ育った丹波篠山の家だ。私も子供のころに連れら

れて何度も行った。行くのはたいてい夏休みで、一週間ほど滞在した。

家は茅葺(かやぶ)き屋根で、古かった。表玄関から入ると土間があり、下駄を脱いで左側に上がると茶の間や座敷や仏間、右側は土間がそのまま広くなって、竈(かまど)のある台所になっていた。土間をさらに進んで裏に抜けると土蔵と井戸があり、その向こうには木がいくつか植わった先に祖母の小さな畑、その向こうに小川、そのさらに向こうは一面の田んぼ、そしていちばん向こうは山の連なりだった。

小学校三年の私には丹波の何もかもが衝撃だった。帰るのがいやで泣いた。世田谷の社宅に帰ってからも毎日泣き、宝物のイチゴ柄ノートに丹波を懐かしむ感傷的な詩めいたものを書いた。４Ｈのシャープペンシルで何度も消して書き直したので、薄ピンク色の紙がぼそぼそになった。

風呂は五右衛門風呂だった。石でできた筒状の湯船の中に丸い木の蓋が浮いていて、それを足で沈めて入る。手洗いは家の外にあって、夜一人で行くのは怖くて、従姉の誰かについてきてもらった。トイレは汲み取り式で、下を向くと白い手が出てきそうで怖く、上を向くと天井の隅に顔が浮かんでいそうでそれも怖く、目をつぶって急いでして、走って出た。

生まれて初めて天の川を見たのは、たぶんその時だ。空がびっしり星で埋め尽くされて、背中がぞわぞわした。きれいよりも不気味が先に立った。地球が宇宙とじかに接していることがわかってしまって恐ろしかった。

表玄関から舗装されていない通りに出る。通り沿いの家々も茅葺きで、どの家もみんな「岸本」だった。家の斜め向かいに今は使っていない倉庫のような建物があって、そこはむかし父の家が醤油の醸造業をしていたころの名残だった。中はがらんとして、人の背丈より直径の大きい木の桶が一つ二つ転がっていた。麹(こうじ)と埃のいり混じった匂いがした。

昔から父は何にでも醤油をかけた。干物にも漬物にもかけた。医者に減塩のことを言われると、決まって「なにしろ醤油屋の息子ですのでね」と答えた。

家の向かいに、無人の神社があった。崩れかけた石段を上がっていくと、木立に囲まれた小高い空き地のような場所があり、木肌のすっかり枯れたお神楽の舞台があった。奥の天井近くに木の額がかけてあったが、かすれてしまって何が描かれているのかわからなかった。石灯籠はうろこ状の白緑色の苔で覆われていた。蟬の声が耳元でシャワシャワ泡のようにやかましか

った。

神社の隣には小さな池があった。アメンボがたくさんいて、どんなに頑張っても虫とり網では絶対に捕れなかった。そのかわりザリガニはいくらでもつかまった。一度とびきり大きいのをバケツに井戸水を張って入れておいたら、次に見たときびっしり子供を産んでいた。卵ではなく、小さい赤いザリガニの仔だった。

丹波の家には祖母と、伯父一家が住んでいた。いとこは四人姉妹だった。伯父さんは父より十歳上で、眼鏡をはずした父の顔をしていた。寅年生まれで名前は虎之助。いちばん上の従姉は、小学校で成績表をもらうときいつも父親の名前で呼ばれるので、すごく恥ずかしかった。

九〇年代、役所勤めを終えた虎之助伯父さんは郷土詩人になって詩集を二冊出した。〈私の腹の中には新月を食べる驢馬（ろば）が棲息している〉これは「旅愁」という詩の出だしだ。〈女の胸で　ねこやなぎが膨らみ　男の胸では　雪解けが始まる〉これは「早春」という詩の冒頭。でもいちばん前衛的なのは「腸の検査」という詩で、〈〇月〇日　国立篠山病院に入院〉から始まって〈ＰＭ１・００　退院〉まで、何時何分に水を飲み、下剤を飲み、浣腸をし、レントゲンを撮ったかが、全十五行にわたって淡々と書き連ねてある。

祖母は小さくて皺くちゃで働き者だった。庭の小さい畑でいろいろなものを少しずつ作っていた。よくトウモロコシをもぐのについていった。畑の終わるあたりに、またいで越えられるほどの川があり、祖母はそこで野菜を冷やしたりお碗を洗ったりしていた。川べりに絵本で見たとおりのガマの穂が生えていた。揉んで指を嗅ぐとハッカの匂いがするハッカ草。地面を掘ると出てくるオケラ。川の向こうは一面田んぼで、アオサギが首を伸ばして立っていた。「アオサギは臭いんやで」と教えてくれたのは、たしかいちばん下の従姉だった。

従姉たちは私をいろいろなところに連れていってくれた。川で泳ぎ、中学校のプールで泳いだ。川で泳いだ帰り、草むらに猫の死骸があってあばら骨が見えていた。生まれて初めて見る死体だった。薄桃色の小さい可愛い花をつける蔓植物が繁茂していて、でもそれは「ヘクソカズラ」という草でけっして触ってはならなかった。夕方、プールの向こうにものすごく大きな二重の虹が出ていた。

小高い山の上にのぼってお弁当を広げたら、遠くからデカンショ節が聞こえてきた。夜のデカンショ祭に向けて、昼間から町のあちこちで拡声器で流しているのだ。

デカンショ祭は、篠山城跡の広場に大きな櫓を組んでやる巨大な盆踊りだった。私は興奮して輪の中に飛びこみ、がむしゃらに何周もした。従姉たちは控えめに輪に入り、ひらり、ひらりときれいな手つきで踊った。

中二の夏、私はもう輪に入って踊らなかった。自意識をこじらせて、なぜか屋台でモモレンジャーのお面を買った。今も実家の押入れのどこかにある。

四人の従姉は私より五歳から十歳年上で、仕草や土地言葉のリズムや服や好きなものや、何もかもが大人っぽくて憧れた。

ある日従姉たちが土蔵の中にいたら、凄まじい夕立が来て母屋に戻れなくなった。私が大きなビニールシートをかぶって土蔵まで走り、みんなでそれをかぶって一列になって戻った。「あったまいい！」と褒められて嬉しかった。

家の表玄関から入ってすぐ右の、通りに面した場所に、そこだけ床が板張りで大きな窓ガラスを嵌(は)めこんだ部屋があった。元は事務所だったのかもしれない。部屋の一角にさらにガラスで仕切った電話ボックスほどの謎の空間があって、中に入って向かい合わせのベンチに座ると、列車に乗っている気分になって面白かった。

ある晩、その部屋に誰かが押し入った。外に通じる引き戸が半分開いていて、机の上に新聞紙の包みが載っていた。中にはいちばん上の従姉が学校でもらったメダルや賞状が入っていて、「ごめんなさい」と達筆のメモが添えられていた。以前に盗まれたものだった。床の上に点々

と泥の足跡が残っていた。今も「夏の夜のミステリー」という言葉を聞くと、あの夜を思い出す。

去年の五月、伯母さんの葬式で数十年ぶりに丹波に行った。伯父さん亡きあともばりばりに元気で、九十三歳まで生きた。四人の従姉はみんな結婚して、子、孫、曾孫入り乱れた賑やかな葬式だった。斎場から東京にとんぼ返りしたので、あの丹波の家を見ることはできなかった。井戸は、まだあるだろうか。

父が子供のころ井戸水で冷やしたキュウリが好きだったか、確かめる機会を私は失った。昔の丹波の写真を見せても、今の父はただ不思議そうに眺めるだけだ。ときどき私と妹をまちがえる。私の名前を忘れる。

この世に生きたすべての人の、言語化も記録もされない、本人すら忘れてしまっているような些細な記憶。そういうものが、その人の退場とともに失われてしまうということが、私には苦しくて仕方がない。どこかの誰かがさっき食べたフライドポテトが美味しかったことも、道端で見た花をきれいだと思ったことも、ぜんぶ宇宙のどこかに保存されていてほしい。

田んぼの中を突っ切って、一両だけのディーゼル列車が一時間に一本だけ走る。「百円もう

けるのに八百円かかる」と伯父と父が笑って話す、赤字路線だ。帰りの列車の中で、「もうすぐだよ」と言われて窓から外を見た。いちばん下の従姉が、ちょうど私たちが通る時刻に合わせて見送ってくれるという。一面緑の田んぼの中に自転車を停めて手を振っている姿が一瞬だけ見えて、すぐにまた緑に呑まれた。